

# いやしのツーリズムに関する社会学的考察

—スケープ・身体・原風景—

宮澤 慧太（菱山ゼミナール）

HS21-1142A

## 目次

第 1 章 問題の所存と本稿の位置づけ

第 2 章 現地調査

第 3 章 分析

第 4 章 考察

おわりに

## 論文の要旨

### 1 問題の所存と本稿の位置づけ

近年、「パワースポット」という言葉が頻繁に使用されるようになり、またそれに伴う「パワースポット」観光が注目を集めている。しかし今日の観光においては、祭祀・儀式を行う神聖な場所や神社仏閣をはじめとする伝統的な空間的意味合いを持つ場所が、観光地化される過程で同時に大衆化され、「パワースポット」という観光対象のメタファーとして広く人々に享受されているのではないだろうか。

人がどのようにその場所を捉え、どのような空間として認識しているのかという議論は、J. アーリーや A. アパデュライのスケープ論を中心にさまざまな社会学的諸概念からアプローチされている。これらのスケープは人々の社会的な生活と密接に結びついている。一方で古典的な議論を基にした、グローバル化により形成されるエスノスケープやメディアスケープなどの、現代社会における新たな空間的な編成の議論は必要である。そこで本論では、「パワースポット」とされる場所が身体にどのように影響しているのか、原風景は「いやし」のスケープにどのような影響を与えるのかについて、現代社会のスケープ視点を加えながら論じる。

### 2 現地調査

雑誌やパンフレット、SNS 等で「パワースポット」や「いやし」とされる齋場御嶽、江の島、亀岩の洞窟の 3 箇所に行き、現地調査をした。

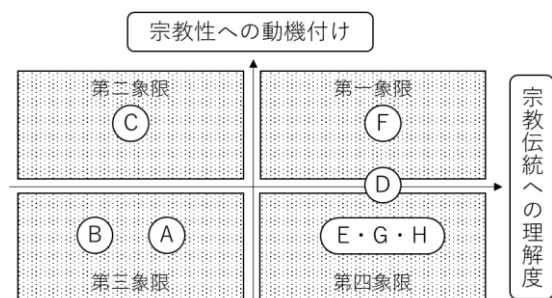
### 3 分析

齋場御嶽、江の島、亀岩の洞窟の 3 箇所を対象に、インタビューを中心とする現地調査を通じてそれぞれの特徴や観光客の認識を分析する。

### 4 考察

齋場御嶽では、世界遺産登録以降、観光客の増加に伴い、観光客が想像する齋場御嶽のイメージが、「聖性」という側面を介して「パワースポット」のように捉えられているという現状が明らかになった。また、門田(2017)の考察を基に、訪れる人を 4 つの象限に分けたものが、以下の図 4-1 である。

図 4-1 齋場御嶽訪問者分類図式



出典：筆者が作成

江の島は、歴史的な場所や龍神信仰などの伝統的な価値だけでなく、観光地化の過程で多様な引き出しが強調され、現代の観光要素につながっていた。特に「エスカー」やヨットハーバーなどのテクノスケープやエスノスケープとい

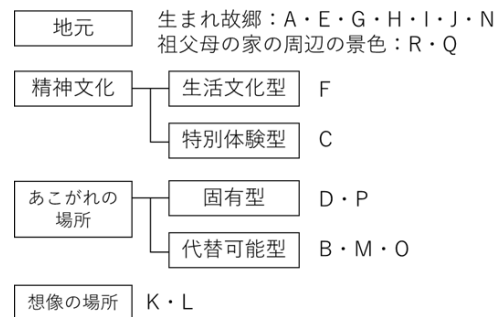
う現代社会特有の要素が融合されていることがわかる。

亀岩の洞窟では、「ハート形」の風景が SNS で話題となり、観光の象徴となっている。しかし「ハート形」の景色のみが強調され、見るための季節、気候などの自然条件的な特性が観光客の期待に応えきれず、洞窟本来の持つ自然などの要素が伝わっていない可能性が見られた。また、道の駅やカフェが目的地へ行くまでに立ち寄る場所としての「中間観光」的な意味合いを持っていることが明らかとなった。

これらの場所をタイプ別に分けると、斎場御嶽は伝統性の持続が重要視される「持続型」であるのに対し、江の島や亀岩の洞窟はサウンドスケープやテクノスケープ、SNS などの融合により観光需要に応じて新たな価値を主体的に生み出していく「強化型」である。空間的意味合いの差異に基づく「持続型」と「強化型」の特徴はアーリ (2000=2006) がド・セルトーの議論を基に論じた「戦略」と「戦術」の対比にも見られる。しかし空間論だけでなく、そこにさまざまな人間関係や人間の感性、インターネット空間といった現代の多様な社会的な要素が介入すれば議論はもっと複雑なものになるだろう。

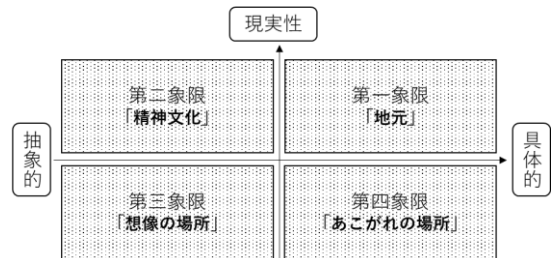
また原風景については、「地元」「精神文化」「あこがれの場所」「想像の場所」という 4 つのタイプが抽出された。これらは人間関係や体験、精神性、非日常感、そしてマスメディアの影響といった要素に基づいて分類され、いやしや原風景の形成プロセスの多様性が明らかになった。特に、視覚、聴覚、触覚、嗅覚などの身体的感覚と原風景との結びつきが強調され、個々の風景体験が感情や記憶と結びついていることが明らかになった。原風景をタイプ別にグルーピングしたものが図 4-2 である。さらにそれらのグループを 4 つの象限で特徴ごとにまとめたものが図 4-3 である。

図 4-2 原風景のタイプ別グルーピング図



出典：筆者が作成

図 4-3 原風景の分類図式



出典：筆者が作成

アーリ (2000=2006) がベルとニュービーの議論を基に論じた古典的なコミュニティの持つ意味において、「地理的近接性」、「ローカルな社会システムとしてのコミュニティ」概念、「人間同士のきずな」の全てが本稿における「地元」グループから原風景を構成する要素として確認できた。また、そこでの景観が記憶と時間性をもった場所として「タスク・スケープ」を中心に織りなされているというアーリ (2000=2006) の指摘も、本稿における「地元」グループから見られた。一方で、「いやされる」という身体的な感覚は、全ての原風景のタイプと密接に結びついていることが明らかになった。

### 主要参考文献

Appadurai, Arjun, 1996, *Modernity At Large: Cultural Dimensions of Globalization*, Minneapolis: University of Minnesota Press (2004, 門田健一訳『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』平凡社.)